

4年 社会科学習指導案

授業者 坂井 遥

1. 単元名 「ごみを出す その先に」(住みよいくらしをつくる)

2. 単元の目標

○ごみを処理する事業について、ごみ収集作業員の人の働く姿に着目しながら各種資料を調べることを通して、ごみを処理する事業は生活環境の維持と向上のために必要不可欠なものであることを理解する。
[知識及び技能]

○ごみを収集する仕組みやごみを処理する事業に携わる人や地域の人との協力に着目して追究したいことを見出し、人々の生活環境の維持と豊かなくらしの実現を目指して安全かつ確実に市民のごみを収集する人の努力や苦心に迫ることを通して、ごみを処理する事業が果たす役割について考え、自分の言葉で表現する。
[思考力、判断力、表現力等]

○ごみを処理する事業について自ら主体的に追究していくことを通して、ごみを処理する事業が市民の生活環境を支えていることについて捉え直し、自分にもできることを考えていこうとする。

[学びに向かう力、人間性等]

3. 子どもと教材

本学級の子どもは、社会科授業において、身近な地域に見られる様々な社会的事象をもとに「考えたい」「調べたい」「実際に見聞きしてみたい」と自ら働きかけながら、社会認識を深めていく。3年「かわる道具とくらし」では、静岡市役所本館の外観が昔から大きく変化していないことについて、下校中に庁舎の壁に刻まれた文字や記念碑を見たり、市役所に質問することでその理由を確かめたりしていた。

また、子どもは、多様な社会的事象に目を向けていく中で、その背後にある人の思いを感じていく姿も見られる。3年「店ではたらく人と仕事」では、実際に地域の家庭用品店の見学を行い、店主から直接話を聞く機会を得た。店主の「(来店客の)行動から気持ちを読み取る」という言葉は、半年以上経った今でも子どもの会話の中に登場する。買い物を通して客に楽しく嬉しく幸せになってほしいという店主の信条に共感したのだろう。また、冬休み明けには「今年の出初め式、中止になっちゃったらしいよ」と話題にしていたこともあった。出初め式は、冬休み前の「火事からまちを守る」の授業の中で、子どもが持参した消防団員募集のチラシに掲載されていたものだった。中止の理由は、県外で発生した災害支援であることでも話題となっていた。消防の一年の仕事始めの行事が中止となったもどかしさや、有事の際は県内外を問わず被災地に駆けつける隊員の使命感のようなものを感じとったのかもしれない。

4年生となった子どもは、今年こそ運動会で勝ちたいという思いを強くもち、連日休み時間に運動場へ向かう姿が見られた。ある日、学年競技「台風の目」の練習で、全体と比べてタイムの遅かった一つのチームが責められたことがあった。そのチームの子どもは、自分は走るのが遅いけれど速く走りたい気持ちは人一倍あることを仲間に伝え、その強い気持ちから得意の算数を活かし、折れ線グラフで学級の競技タイムを表してきた。また、ある子どもは、「お願いがあるんだけど、私たちじゃ気づかないことを教えて」と、手持ち無沙汰のように体育館の隅に座っていた怪我で見学中の仲間に、共に練習に向かってほしいことを求めた。見学の子どもは、自分も学級の力になれることに希望を感じたのか、タイムを測ったり動画を撮影したりした。このような子どもの姿から教師は、一人ひとりに運動会への熱い思いがあること、だからこそ一人ひとりが学級のためにできることを考え行動すること、そのような一人ひとりが学級を支えることを考えながら進んだ運動会であったように思えた。

今後も子どもは、学校生活や家庭生活の中で多くの人やもの、ことにふれ、多様な見方や考え方、感じ方に出会うだろう。自らつながり、関わっていく中で、その見方や接し方を考え、さらに強めたり広げたりしていってほしい。ときには、相手の言動や行動の背景を汲み取ろうとせず、自分の一面的な印象で判断し行動した結果、相手と意見がすれ違ったり衝突したりすることもあるだろう。そのようなときだからこそ、行動や結果などの目に見えるもの以上に、その背後にある人の思いを感じ、その思いを

自身の思いと重ねながら進んでいってほしい。そして他者の思いにふれた子どもが、自分にも目を向け、身の周りの人やもの、ことにこだわりや思いやりを込めて関わっていくことを願っている。そこで、本単元では、ごみの処理に携わる収集作業員を材として、他者の行動と思いのつながりを見つめ始めている本学級の子どもを支えていきたいと考えた。

ごみは、一般的に役目を終えた不要なものや役に立たないものとされ、前向きな印象をもつことは少ない。このような人間の心理は、その見た目やにおいなどのごみの性質から、ごみの処理や再利用に関わる施設が市街地から距離があることにも表れているといえよう。しかしながら、私たちは食事や勉強、仕事、娯楽など、生活と同時にごみも生み出している。いわば、ごみは私たち人間の「生活の証」なのである。一般に、ごみ集積所は10軒に一つの計算で設置され、その数は静岡市内だけでも約17000箇所にのぼる。排出された大量のごみは、日々収集作業員による人間の腕一つで集められ、処理施設に運ばれる。人々の生活環境の維持と向上のため、ごみが安全かつ確実に集められている事実に出会うことは、子どもがごみの処理の事業やそれに携わる人に対する見方を広げるきっかけとなると考える。中でも、自分の出したごみにいちばん最初に触れる他者であり、そのごみを直接運ぶ人である収集作業員との出会いは、ごみを処理する事業が自身の生活と強く結びついていることを実感し、衛生的で快適な生活環境にとってなくてはならないものであることを捉えていくことにつながるだろう。そこで、本単元では、静岡市葵区内全ての家庭可燃ごみ

収集業務を市より委託されている「(株) 静岡シティクリーン」の望月氏をはじめとした収集作業員の方々と出会う機会を設ける。望月氏らは、収集作業員が敬遠されがちな仕事であり、日々多くの苦労を抱えながらも、絶対に無くならない仕事であり、ライフラインの最重要部分であると信念をもって仕事に励む。子どもは、一見自分にとって好ましく感じられず、受け入れ難く思うものであっても、仕事に立ち向かう収集作業員によって、生活が支えられていることに気付いていく。そして、これまでの生活経験の中では見えていなかった望月氏ら収集作業員の働く姿の裏側にある努力や苦心、信念や願いなどの情意に思いを致し、「このままでは…」「これでよいのか…」と自分に目を向けていくだろう。追究の中では、望月氏ら収集作業員が道路に落ちているごみも拾いながら業務にあたっていることや、収集作業員に協力しようと自らごみ置き場に立って収集を助ける地域住民が多く存在する事実にも出会っていく。仕事の範疇や立場を超えて、誰かのために行動する人の思いにふれていくことは、自分にできることを見つめ始めている子どもを支えるものとなっていくと考える。

本単元を通して、ごみの処理に携わる収集作業員の働く姿と、その背景にある人の努力や苦心に存分にふれていくことは、子どもがごみを処理する事業が果たす役割について考え、自分にできることを考えていくことにつながるだろう。社会的事象に対する見方や考え方方がより強まったり広がったりした子どもが、自分にも何かできないかと希望を膨らめ、自ら社会に関わっていきたいという主体的・社会参画への芽を育てていくことを期待したい。そして、自身の周りに存在する人やもの、ことには人の思いがあることを心に、その一つひとつにこだわりや思いやりを込めて関わっていくことを願っている。



(図1) 静岡市葵区内のごみ集積所で家庭可燃ごみを集める収集車と収集作業員

4. 本単元における『その子らしく学ぶ』～本単元で願う「心の動きを伴う経験によってその子に還るもの』～

子どもは、教室で不要になったものや落ちているものを当たり前のようにごみ箱に捨てている。不要とされたものに対して前向きなイメージをもつかどうかも含め、ごみの処理の事業やそれに携わるについて、子どもはそれぞれの価値観をもっているだろう。家庭では、ごみ袋を地域で定められたごみ集積所に運ぶ子どももいるものの、多くの子どもはその後どうなるのかを立ち止まって考えたことはないと推察される。

子どもはまず、静岡市内にごみ集積所が多数存在している事実に出会う。子どもにとって身近な信号機の数よりもごみ集積所は遥かに数が多いことから、ごみが人々の生活に密着したものであることに気付くだろう。子どもは、それぞれの生活経験をもとに、ごみ集積所とは何であるのかや、身近なごみ集積所の場所、ボックスやネットなどの有無、収集日や時間、ごみの散乱など集積所で起きている問題について共有していく。共有していく中で生まれた疑問について確かめるため、実際にごみ集積所へ見学に出かける。子どもは、集積所に出されたごみやごみ収集車の仕組み、収集作業員の姿などから、安全かつ確実にごみが収集され、処理されていくことを捉えていく。見学をした公園の周りだけでもごみ集積所が多く存在することなどから、ごみと自分たちの生活との関係の深さも実感するだろう。その一方で、ごみの性質から、その収集や処理に携わることに対してあまり良い印象をもてないままの子どもも多くいると予想される。なぜごみを収集する仕事に就こうと思ったのか、嫌だと思ったことや大変だったことはあるのか、仕事をしていて嬉しかったことはあるのかなど、自分の感覚と実際の収集作業員の感覚はどう違っているのかを確かめたくなるだろう。

そこで、実際に静岡市葵区で家庭可燃ごみの収集にあたる「(株) 静岡シティクリーン」の望月氏をはじめとする収集作業員の方の話を聞く機会を設け、収集の業務内容や収集車の仕組み、働く人の努力や苦心などに迫りたいと考える子どもを支えていく。「無駄な仕事は一つもない、ごみとは生活の証であり、絶対に無くならない仕事である」と信念をもって仕事に励む望月氏の言葉に、子どもはごみ収集作業員の果たす役割について捉え直し、その信念に強く心を動かされるはずだ。そして、ルールを守らないごみや、収集作業中に出会った歩行者からの冷やかな言動など、望月氏ら収集作業員は仕事の苦心について語ると、「こんなに大変な思いをしてやっているのに酷すぎる」「このままでいいのか」と、収集作業員の思いと自分の思いを共鳴させていくだろう。そして、苦労が多いにもかかわらず、どうして仕事を続けられるのか、ごみ集積所の見学で知り得た事実や、望月氏が語った地域住民からの心温まる手紙や災害発生時のごみ収集事例など、様々な社会的事象をもとに考えていく。ある子は、「自分たちの出したごみを一生懸命集めてくれているのに」と、望月氏の言葉に強い共感を示し、自分も望月氏のために何かできないかと、ごみを排出する側の視点で考えていくだろう。またある子は、「ひどいと思うけれど、ごみはごみだし、仕方がない。でも、もっと工夫して仕事をすれば収集員さんが楽になるのかもしれない」と収集する側の視点から考え始めていくだろう。子どもは、ごみの収集がなくなってしまったまちの多くの人の快適なくらしが維持できなくなることや、自分の生活にとってなくてはならない仕組みであることなど、その捉えをより深いものにしていく。そして、「このままでは…」「これでよいのか…」という考えをより一層強くしていくだろう。その後、子どもは収集作業員を助ける地域住民の存在にもふれていく。様々な立場の人がつながることでごみを処理する事業が成り立っていることを捉えると、子どもは再び自分自身に目を向け、自分にできることや収集作業員にできること、まちの人が協力してできることなどを考えていくだろう。このように、ごみの処理に携わる人の努力や苦心に目を向け、その思いを感じながら多角的に追究する過程で、子どもは社会的事象に対する自分なりの再解釈や価値判断を行っていく。本単元を通じて、子どもが社会認識をより深めたり、自分にもできることはないかと現実社会における自分自身の生き方を見つめたりしていくことにつながっていくことを願っている。

5. 単元構想（全7時間扱い／本時は第⑥時）

＜教師の投げかけ＞

子どもの表れ

最終時における子どもの表れ

①

＜「静岡にある○○の数」を見てみよう＞

- ・静岡市内のコンビニの数は288店舗か。もっと多くありそうだな
- ・静岡県内の信号機の数は6835機か。県内全てにしては少なく感じる
- ・ごみ集積所？ごみ置き場のことだよね？17186箇所？約10軒に1つ？
- ・県内全ての信号機よりもかなり多いよ！びっくり
- ・どうしてこんなに多いの
- ・どの家でも毎日いっぱいごみが出るからかな
- ・ごみ収集車が一軒一軒まわってごみを集めるのは大変じゃん。近所の人たちでまとめておくんだと思う
- ・学校にもごみ集積所ってあるの？
- ・学校の周りには、どのくらい集積所があるんだろう
- ・ここからいちばん近い集積所ってどこにあるのかな
- ・家の近くの公園もそうだよ。出した後は、黄色いネットをかけるよ。違うところでは青いネットも見た
- ・マンションは、ごみを入れるボックスみたいなものがあるよ
- ・カラスがごみ袋を突いてごみが道路に出ちやっていた。汚かったな
- ・ごみ収集車にごみを入れていた。ごみは、重いし、嫌だよね
- ・月、木曜日が自分の家のごみの日だよ。朝に出すのを手伝っている
- ・学校の周りは火、金曜日がごみの日なんだ

②

＜実際にごみ集積所を見に行ってみよう＞

- 0・ごみ袋の中の紙や生ごみが透けて見える。やっぱりきついにおい
- ・なんだか気分が悪くなってきた…
- ・音楽が鳴っている。なんの曲？気付いた人がごみを出しに来たね
- ・収集車には「静岡市家庭ごみ収集委託車（株）静岡シティクリーン」って書いてある。「No.4」は車体番号？何番まであるのかな
- ・収集車に籌がついている！道路の掃除もしてくれるのかな
- ・公園の周りだけでこんなにごみ集積所があるんだ。市内に22500箇所もある理由がわかった気がする

- ・運転する人、ごみを収集車に入れる人の3人1チームになっている。3人の息がぴったり合っているから、素早く安全に集められる
- ・危ないから車には近づかないでほしいって言われたよ。確かに身体が巻き込まれたら怖いよね
- ・ごみがちゃんと入り切るように、工夫しながらボタンを操作している気がするよ
- ・ごみを集めただけじゃなくて、集積所に散らかったごみや、道に落ちているごみも拾っていた。まちのためにやってくれているのかな

③

＜見学を振り返ろう＞

- ・私たちの安全を気遣ってくれたね
- ・収集車についていた籌は何に使うのか気になる
- ・協力して素早く収集できるように工夫されていた。他にも、仕事の工夫はあるのかな
- ・自分たちのごみをこうやって集めてくれている人がいるから、まちがごみだらけにならないんだよね
- ・辛そうな仕事だなって思うんだけど、やりがいはあるのかな

- ・すごく大変そうだった。暑いし、重いし、汚いし、くさいし、危険だし
- ・分別や時間のルールを守らないでごみを出す人もいそうだし、自分だったら正直やりたくない。なんでごみ収集作業員の仕事をやっているんだろう？
- ・仕事をしていて嫌なことや苦労していることが絶対あるはず

収集作業員さんに仕事内容や工夫、やりがいを聞いてみたいな

○教師の働きかけ

○第①時では、ごみ集積所が生活に密着していることに着目できるよう、静岡県内の信号機の数などと比較してその数の多さを提示する。

○実際のごみ集積所に排出されたごみの写真を提示することで、自らの生活経験をもとにごみの収集や処理に関心を向けていくことができるようになる。

○第②時では、ごみの収集を子どもが肌で感じ、ごみ収集に対するその子ならではの解釈をより深め、広げられるよう、地域のごみ集積所でごみを収集する人の仕事の様子を見学に出かける。

○第③時では、実際に見学し感じたことを共有していく。子どもが収集作業員に目を向け、実際に関わってみたいと思えるよう、見学だけではわからなかった疑問を広げていく。

④⑤ <ごみ収集作業員の望月さんたちに話を聞いてみよう>

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> こんなに近くで収集車を初めて見た！この回転板でどんどんごみを押し込むんだね。近くで見ると、車は意外と綺麗だな 歩行者にすごく気を遣いながら安全第一で仕事をしているんだ 毎日洗車しているんだね。本当に綺麗か抜き打ちチェックもあるんだ。綺麗な車でまちを走れるようにしてくれているんだね 時間外に出されたごみなどを確認する巡回車が別であるんだね。確実にごみを回収するための工夫だ 収集対象外のものは、袋を置いたときの音でわかるんだね。去年は、収集車から白煙が2回出たらしいから怖いな | <ul style="list-style-type: none"> 作業服に飛んだごみの水分のにおいは一日取れないって。毎日の洗車もあって、鼻の奥の粘膜までにおいがこびりついちゃうんだ まちで、鼻を押さえて逃げていく人もいるって。水をまかれたこともあるみたい。望月さんは仕方ないって言っていたけど…もっと身近な存在にしてほしいとも言っていたね 地域の人からの手紙が素敵。気持ち良い生活は、収集のおかげだよ 嫌がられるし、多くの人がやりたがらないけれど、「無駄な仕事は一つもない、ごみは生活の証、自分たちの仕事は絶対に無くならない仕事」の言葉が心に残った |
|--|---|

水をまかれたり、にらまれたり、すごく苦労が多そうだね

- | | |
|---|--|
| ごみを出したことない人なんていないのに。自分の出したごみを集めてくれているのにひどいな | でも、やっぱりごみはみんな嫌に決まっているし、ごみに関わりたくないっていう気持ちもわかる |
|---|--|

○第④⑤時では、見学時にはわからなかつた働く人の工夫や努力を直接聞いてみたいと考える子どもの思いを支えるために、望月氏を招き、話を聞く機会を設ける。

○話の前に、実際にごみ収集車の車体やごみを収集する様子を間近に見る。そうすることで、その後の望月氏の語る事実がより明確に子どもの中で再現されるだろう。

○第⑥時では、苦労の多い収集作業員の仕事を続けられる理由を確かめたいと考える子どもの追究意欲を支え、ごみの収集に対するその子ならではの価値観が表出されるよう、望月氏が仕事のやりがいを感じるきっかけとなった出来事について語る資料を提示する。

⑥ 望月さんたちが、こんなにも大変な仕事を続けられているのはなぜ？ (本時)

- | | |
|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 望月さんは、絶対に無くならない仕事って言っていた。確かにごみはなくならないし、必要な仕事だつて思って頑張っているんだよ 地域の人がこうやって手紙をくれると、自分のおかげで助かっている人がいるって思えるからだよ | <ul style="list-style-type: none"> 正直わからない。ごみに関わりたって思えないもん もう少しみんなにルールを伝えれば仕事も楽になると思う もっとみんなが、ごみを少なくしたりルールを守って出してくれたりすればいいかも |
| <ul style="list-style-type: none"> 人間が生活していく上でごみは必ず出る。災害があってごみ収集がストップしちゃうと、まちにごみが溢れちゃうんだよね。こんなまちは嫌だ ごみを気持ちよく集めるのは難しいよね。望月さんたち以外の力でなんとかならないかなって思う。自分にもできそうなことはあるかな | |

⑦ <これまでの学習を振り返ろう>

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> ごみを出して、なくなっているのは当たり前だと思っていたけれど、大変な思いもしながら確実にごみを集めてくれる収集作業員さんがいるんだ まちでごみ収集車を見かけたよ。知っている収集作業員さんじやなかつたけど、自分たちのごみを安全に確実に収集してくれているって思った ごみ集積所の掃除やネットの片付けをしている地域の人たちが素敵だと思った。自分たちのごみは自分たちで最後まで見届けるところがいいね 収集作業員さんにやってもらってばかりじゃなくて、ごみ袋をちゃんとしづぱったり、ごみを出すときにネットをしっかりと被せたりすることは自分にもできそう 水道や電気もなくなったら大変だよね。みんなが気持ちよくくらすためのまちの工夫は他にもありそうだよ。調べてみたいな | |
|--|--|

○第⑦時では、ごみの収集が実際に多くの人の支えになっていることが感じられるよう、地域住民によるインタビュー資料を提示する。